

# 「拉致問題に関する中学生サミット」 参加報告レポート

作成日 令和7年12月15日（月）

## 「拉致問題に関する中学生サミット」について

本サミットは、政府拉致問題対策本部が主催しており、中学生が拉致問題を主体的に考え、拉致問題の啓発を支えるリーダーを育成することと、全国各地での多様な取組を一層促進することを目的として、今年度の8月8日（金）、都道府県及び指定都市の代表による、「拉致問題に関する中学生サミット」（以下中学生サミット）が東京で開催されました。

今回は福島県人権教育推進地域である、矢祭町立矢祭中学校の高信治仁さん（3年）と本田英敏校長先生が参加しました。お二人から実際に参加してみての感想や学んだことについてお伺いしたので、御紹介します。

## 拉致問題とは

拉致に関する真相は明らかにされていませんが、北朝鮮が拉致するという未曾有の国家的犯罪行為を行った背景には、工作人員による日本人への身分の偽装、工作人員を日本人に仕立てるための教育係としての利用などの理由があったとみられています。（参考：政府広報オンライン）

## 中学生サミットの内容

- 拉致問題御家族の講話
- クリエイティブディレクターによるガイダンス
- グループ協議
- CMの絵コンテ作成
- CM劇の全体発表・講評



政府拉致問題対策本部  
公式チャンネル

## 中学生サミットに参加したお二人にインタビュー

実際に参加しての感想を聞かせてください。



本田英敏 校長先生

**本田校長先生**：拉致問題は歴史的出来事ではなく、今現在も進行している人権問題であるということを実感しました。被害者家族の方のお話を直接聞き、もし自分の娘がと思うと胸が締め付けられる思いを感じ、その思いを何十年も感じ続けている被害者家族の方々の

辛さを強く感じました。拉致問題は、拉致された人だけではなく、その家族も被害者であるということを改めて痛感しました。拉致被害者の御両親も亡くなられたり、御高齢になられたりしており、その次の世代が被害者の会を引き継いでいるように、次代を担う中学生がこの問題について、理解を深め、問題解決の後押しをしていくことが大事だと思いました。



中学生サミットに参加した他校の生徒と、拉致問題の啓発について議論する高信さん。  
拉致問題を自分事として捉えながら、取り組みました。



高信 治仁 さん

**高信さん**：被害者家族の方々の切実な訴えを直接伺ったことで、これまでニュースなどで触れてきた「拉致問題」が遠い出来事ではなく、私たちの日常と地続きにある現実だと痛感しました。特に、決して諦めないという強い意志に胸を打たれ、問題解決への願い

を共有することができました。サミットに参加するまでは「他人事」だと思っていた部分がありましたが、御家族の想いを直接聞き、この問題が「自分事」になったと感じています。また、全国から集まった同世代の中学生と意見を交換し、それぞれの地域での関心度や考えを共有できたことも大きな学びでした。私たちがこの問題を正しく理解し、周囲に発信していくことの重要性を強く意識しました。私自身の言葉でこの問題を伝えることで、今まで関心が薄かった友人や知人が拉致問題について考えるきっかけを作れるという手応えを感じました。この経験を機に、今後も継続して拉致問題に関心を持ち続け、問題解決に向けた行動を続けていきたいと決意しました。

高信さんの活動の様子についてお聞かせください。

**本田校長先生**：このサミットへの参加は、中学生である高信さんの世界を大きく広げる学びがたくさんありました。彼は、サミットに参加する前に実際に新潟県の拉致された場所を自分で訪問しました。それはこのサミットに参加するということがなければ、訪れようと思わなかったかもしれません。また、サミット当日の拉致被害者の方のお話を聞き、今まであまり深く考えてこなかった拉致への理解、関心が高まったことは言うまでもありません。そして、それは、自分がまだまだ知らない、気付いていない世界の中での問題が多くあるのだということも実感できたことと思います。さらには、全国各地から集まった中学生と積極的にコミュニケーションをと



参加した中学生同士で積極的に意見を述べ合う様子。

りながら、CM づくりを行っている姿を頼もしくも思いました。初めて会った仲間と課題解決に向けて試行錯誤しながら、真剣に取り組む姿がとても素晴らしかったです。

福島県内の中学生に向けてメッセージをお願いします。

**本田校長先生**：拉致問題は、福島県に住む私たちにとって決して無関係ではありません。私たちが普通に生活している「ごく普通の日常の場所」が舞台になっています。これは、私たちが当たり前持っている「自由や安全に生きる権利」が、いかに簡単に奪われかねないかを示しています。また、みなさんと同じくらいの年齢のときに、拉致されています。拉致被害者の御家族は、何十年もの間、愛する家族に会えない苦しみの中で、一瞬たりとも諦めずに活動を続けています。この問題の解決は、「皆さんの関心」と「決して諦めないという強い意志」にかかっています。福島から、皆さんの若い力が問題解決の大きな後押しになることを心から願っています。

CM 作成では、どのようなことを伝えようと思いましたか。

**高信さん**：拉致問題解決のための CM づくりでは、特に 2 つのメッセージを効果的に伝えようと考えました。

1 つ目は、実際に拉致された本人だけが「被害者」ではないということです。拉致問題の被害者と聞くと、実際に拉致された本人について考えることが多いですが、拉致された方の御家族をはじめとする周りの方々も被害者であり、同じく辛い思いをしているのを忘れてはならないと思いました。そのため、CM を見た人の拉致問題の「被害者」という言葉の認識を変えることを重視しました。

2 つ目は、拉致問題について今私たちがまずできることは、「知る」ということです。拉致問題のために行動するということが少し難しく感じますが、何よりも多くの人を知ることが大事だと伝わるような構成を意識しました。



「拉致問題に関する中学生サミット」メイキング(令和7年度)



言葉を吟味しながら「拉致問題を多くの人に知ってもらうためには、どのように伝えればよいか」を、参加者と一緒に考えている様子。

**高信さん**：福島県の中学生の皆さん、拉致問題について一緒に考えてみませんか。

東日本大震災を経験した私たちは、「日常を突然奪われる」ことの辛さを知っています。拉致問題は、まさに被害者の方とその家族から大切な日常と未来を奪い続けている深刻な人権侵害です。

この問題は、遠い国の話ではなく、私たちが声を上げ続けることで解決を後押しできる現実的な課題です。まずは、被害者の方々と御家族の願いを知ることから始めましょう。そして、この問題を風化させないという決意を胸に、一緒に発信していきましょう。私たちの小さな行動が必ず大きな力になっていくはずです。

## ／ 令和7年11月19日 矢祭町人権教育研究発表会を開催しました ／

11月19日(水)、矢祭町立矢祭中学校で矢祭町人権教育研究発表会が開催されました。当日は、佐藤愛教諭(1年・学級活動)、半谷詩乃教諭(2年・道徳)、薄葉歩美教諭(3年・道徳)の3名の教諭が人権教育の視点を取り入れた研究公開授業を実践しました。いずれの授業でも、生徒同士や生徒と教師の間で丁寧な言葉のやり取りが見られ、人権を大切にする姿勢が感じられました。

授業後の分科会では、参加者が活発に意見交換を行い、「人権を子どもたちにどのように伝えるか」について幅広い議論が交わされました。続いて、日本大学の渡邊真魚教授を講師に招き、「地域コミュニティと人権」をテーマとした教育講演会が行われ、「ふくしま道徳教育資料集」を活用した道徳教育と人権教育の視点について講話がありました。

後日、組織的に人権教育に取り組む矢祭中学校の本田栄敏校長先生と公開授業を行った3名の教諭へのインタビューを掲載する予定ですので、ぜひ御覧ください。



参加者と人権教育について意見交換する佐藤 愛教諭